

編集後記

臨床現場で稀な症候に遭遇したとき、なかなか診断がつかない場合、治療に難渋した際に、過去の症例報告が役に立ったという経験は誰もがされてきたと思います。有用な症例報告は臨床で困った時に極めて有り難く、より良い医療を行うためにはなくてはならないものでもあります。では、有用な症例報告とはどのようなもののでしょうか？ 単に珍しい稀な症例というだけでは、残念ながら有用性は乏しくなります。有用な症例報告には、これまで知られていなかった症候や経過、新しい診断手技、新しい治療、予期せぬ有害事象、他の疾患との関連性や鑑別などについて臨床に役に立つ新規知見がしっかり示されていることが必要になりますし、知っている疾患や遭遇しやすい疾患で新規知見が示されれば、その価値はさらに高まります。「臨床神経学」には臨床で有用な症例報告が充実しており、著者の皆さんが詳細に記載した経験症例の症候や臨床データの経時的観察所見、診断や治療のピットフォールは、医療の進歩に寄与する貴重な知識の共有となり、医学の発展にも繋がってきました。

皆さんは日々の臨床の忙しさの中で、患者さんを助けたいという「情熱 (passion)」を持って診療に邁進されていると思います。そして、日常診療で患者さんの症候や検査所見の疑問に悩み続けた後にいくつものブレイクスルーを見つけてこられたとも思います。私たちにはその発見を社会のために伝える「使命 (mission)」があります。さらに、情熱と使命感を持った上で実際の「行動 (action)」に移すことで結果に結びつけることができます。症例報告は日々の臨床における「情熱 (passion)」と「使命 (mission)」と「行動 (action)」の成果であり、症例報告を通じて新規知見を社会に発信し続けなければなりません。若い先生、そして指導医の先生も一緒に臨床的に有用な症例報告を創り、ぜひ「臨床神経学」に投稿してください。若い先生の論文執筆を応援できるように建設的なコメントもして参りますので、多くの先生方からのご投稿をお待ちしております。

(中嶋秀人)

〈編集委員〉

編集委員長 小野寺 理 編集副委員長 三澤 園子
編集幹事 石浦 浩之 漆谷 真 杉江 和馬
編集委員 今井 富裕 木下 真幸子 古賀 政利 櫻井 圭太 柴田 護
下畑 享良 鈴木 匡子 辻野 彰 坪井 義夫 中嶋 秀人 新野 正明

「臨床神経学」 第64巻 第2号 2024年2月1日発行
編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 西山 和利
印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>